沖縄小児保健賞

沖縄小児保健賞を受賞して

公立久米島病院　小児科
渡　邉　　幸

この度は、沖縄小児保健賞という大変立派な賞をいただきありがとうございます。久米島町は福祉課の保健師・栄養士が小児保健・発達支援に非常に積極的であり、町の理解を得て多くの活動を町の事業として取り組んでいます。また発達支援事業は本島から応援に来てくれている心理士の尽力の上に成立しています。今回の賞は、久米島で小児保健・福祉のために働いている皆でいただいた賞であると思っております。というわけで、久米島で行なっている事業・取り組みについて少しご紹介させていただきたいと思います。

１）久米島子ども健康プロジェクト

久米島町は沖縄県の中でも成人肥満の割合が高く、生活習慣病罹患率も高いです。2011年より町の取り組みで小学５年生から高校３年生までに特定健診に準じた血液検査を行う「子ども健診」が開始され、小児肥満の高さとともに、脂質異常、肝機能障害、耐糖能異常等も明らかになりました。2013年より地域・福祉・教育・医療で共同した「久米島子ども健康プロジェクト」を発足し、勉強会や広報活動を行ったり、小学校で健康授業をしたり、養護教諭と共同して肥満児童の継続的なフォローを行なってきました。

活動開始後、小学生の肥満率は徐々に低下してきますが、中学生の肥満率は依然として高く、高校生からは隠れ肥満率（腹囲・体脂肪率での肥満）が増大しています。若年出産も多いことから、Reproductive healthとも絡めた中学～高校生への健康教育の体制を今後整えていくことが課題となっています。

２）親子支援事業

これまで、久米島内には発達支援のための資源はなく、気になる児をフォローする機能、診断に至るまでのハードル、診断後も療育できる場がないなど、多くの課題がありました。

2015年に当事業が発足してから、沖縄本島から月２～３回心理士の来島が可能となり、島の発達支援体制は大きく変わりました。2018年度より福祉課に児童福祉担当のケースワーカーが雇用となってから、虐待・育児困難感のある家庭への支援も大きく変わってきています。

＜育児相談＞

子育て困難感がある親に対する、心理士による相談。乳幼児健診や学校からの案内などで紹介されるケースが多い。虐待家庭の親へのフォローも行なっている。

＜個別療育＞

主に乳幼児健診や就学時健診で支援が必要と思われた児に対し、心理士が発達検査を行なったのち、月１回１時間の療育を行う。診断や医療の介入が必要なケースは病院に繋いでいる。

＜保育園巡回＞

保健師・心理士で乳幼児健診の前後に島内の各保育園の巡回を行い、気になる児の情報共有を行い、保育士に個別の関わり方指導を行なっている。

＜支援者の育成＞

2018年より保育士・幼稚園教諭を対象にした

ティーチャーズトレーニングを開催。心理士さんのご尽力により、普段の保育環境の工夫から行動療法まで様々な要素を含んだ、質の高い勉強会を毎月開催。１年間参加した保育士からは「受ける前後で保育感が180度変わった」「寄り添う保育の意味がわかった」などとても大きな反響がある一方で、参加者がゼロの園もあり、島内の保育園間の質の差は大きな課題である。

３）就学前に発達支援につなげるための取り組み

＜５歳児健診＞

久米島町では発達特性があり集団生活での困り感が生じていても、家庭での気づきにつながらず支援に至らず、就学後や思春期に二次障害が生じるケースも少なくありませんでした。そこで、2016年度から園医方式、2019年度からセンター方式での５歳児健診を行なっています。

園医方式では保育園の後期（10～12月）の内科検診の際に簡単な行動観察、保育士との情報共有を行い、「気になる児」を対象に５歳児健診を案内。昼寝時間を利用して、保護者・担任が同席のもと医師による構造化された５歳児健診を行いました。児の特性や困難感を共有できる事で、早期支援につながるケースが増えた一方、「気になる子が受ける健診」という印象を持ち拒否される保護者もいました。

2018年度からは５歳児の全家庭に案内を出して希望制（保育園児は保育園、自宅児は役場）で５歳児健診を行いました。保護者と担任にSDQ（子供の強さと困難さアンケート）を記入してもらい、困り感を客観的に評価できるようにしました。半数以上のお子さんが健診を受け、支援につながるケースもあったものの課題は残りました。

2019年度より全児対象の５歳児健診を行うことが可能となり、乳幼児健診の日程に合わせて乳健会場で５歳時健診を実施しました。群馬県（全県で５歳児健診を実施）の実施要綱を参考に、事前に保育園担任と保護者にSDQを提出してもらい、健診会場では退職後の保育士の協力を得て集団面接で絵本の読み聞かせや自己紹介、粗大運動の確認を行なったのち、医師による５歳児健診を行ないました。集団面接を保護者も参観したことで、気付きに繋がりやすくなり、支援につながるケースも多いと感じています。

＜就学時健診＞

５歳児健診がこのように確立するまで、就学時健診で５歳児健診に近い診察を行い、発達特性の評価を行ない、親子支援事業につなげる取り組みも行なっていました。時間の制約があること、「就学時健診」の場で評価されることの心理的負担等が課題となっていました。

2019年より大幅に方法を変更し、幼稚園（年長）の保護者に８月頃に発達・生活評価シート（心理士が作成）の記入を依頼し、９月に心理士と医師とで各園半日の行動観察を行い、希望する保護者に対し、医師との就学前個別相談を行う流れにしました。全体の約２割の保護者が個別相談を希望され、その半数以上の児に就学前の個別療育を行なっています。

４）発達外来・子ども療育外来
～島久ゆいまーるプロジェクト～

2017年８～11月に国立成育医療センターでの発達障害診療研修を経て、2018年１月より久米島病院で月２回の発達外来を開設しています。また同年４月より親子支援事業の協力を得て病院での心理士外来（月１回）の開設が実現しました。その後、東京都の島田療育センターはちおうじ（通称：島はち）の先生御厚意により、2019年４月より月１回久米島病院にスタッフ（OT：年５回、ST：年５回、PT：年１回、Dr：年１回）を派遣してもらい、言語療法や感覚統合訓練等を行う「子ども療育外来」が始まりました。療育に関わる医療費は福祉課から補助が出る仕組みとし、患者負担が出ないようにしました。

福祉課との共催で来島の際に勉強会や講演会を行なったり、療育の動画を用いて関係職種での勉強会を行ったりと、島内の支援者のスキルアップにも大きく寄与しています。

５）おわりに

離島や僻地では、

１）発達支援のための資源が少ない
２）支援者の専門性を高めにくい
３）住民の発達障害に対する認識が薄い

などの問題があり、発達支援を進めていくのに多くの困難があります。

久米島では福祉－医療－教育が連携し、資源や人材を流動的に活用することで様々な取り組みが実現していますが、これには行政の理解と心理士の協力が非常に大きいと感じています。

離島文化の中で「発達障害」に対する偏見はまだまだ根強いですが、児や保護者の「困り感に寄り添う支援」、「子どもの『できた！』を増やす支援」にフォーカスして、島の方々の理解・協力のもとで今後も取り組んでいきたいと思っています。

沖縄小児保健賞

ダウン症の息子と歩んだ20年！

ダウン症親の会　たんぽぽだん
代表　仲　地　和　代

時代が平成から令和に変わるときにビッグニュースが飛び込んできた。息子の20才の誕生日！　最高のプレゼントが届きました！

今回、「沖縄県小児保健賞」団体の部で受賞しました。大変、ありがとうございました。

はじめに

私には20才になるダウン症の息子がいます。待望の男の子が産まれ長男嫁として安堵しました。しかし、喜びもつかの間、医師より「ダウン症の疑いがあり染色体の検査をする」と言う。間違いであって欲しいと願いながら告知の日を迎えた。やはり息子はダウン症であった。頭が真っ白になりどうやって家に帰ったのか？　何も覚えていない。

やっと我に返った頃、「母が散歩中、足を滑らせなくなった。」と連絡が入った。「なぜ？」私だけこんな辛い思いしないといけないのかと落ち込んだ。お姉ちゃんたちの前では明るく振る舞ってはいたが学校へ送り出すと我慢していた感情が溢れ出す。一生分の涙の量があるとしたらこの１日で使い果たしたような気がする。

どのくらいたったのか？　覚えていないが。主人が「ダウン症で産まれてすぐ合併症で心臓の手術をしないといけなかったり、病気になったりするけど、この子が元気でいてくれるのは母ちゃんが自分の命と引き換えに神様の所に悪いところを全部持っていってくれたんじゃないかな。」といってくれた。それから少しずつ息子と向き合えたような気がする。

検診の日――――

主治医から「この子は無事産まれてきた。これから成長させるのはお母さん次第だよ。」と言われた。

「えっ？私？」

「この子は色々な可能性を秘めているから沢山みつけてあげてね。関われば関わるほど成長する。ちょっと健常の子どもたちより時間がかかるだけ！」

もともとプラス思考の私。時間がかかるなら早くからサポートしなくてはと１歩ずつだが前向きになってきた。やっと心から息子と向き合えるようになった。

たんぽぽだん立ち上げのきっかけ

ダウン症児が産まれベビーは元気だがこのまま家に帰すのが心配のお母さんがいる。当事者で誰か寄り添ってくれる人がいないかと探しているところ私に声がかかった。「試行錯誤の息子の子育てが役に立つ事があるのだろうか？」と考えていると。医師から「僕たちは病気を治すことが出来ても当事者でしかわからない気持ちや不安など心のケアまではしてあげられない。」

「私も初めは不安だらけだったけどやっと今向き合えるようになった。１人じゃない、自分だけじゃない。」

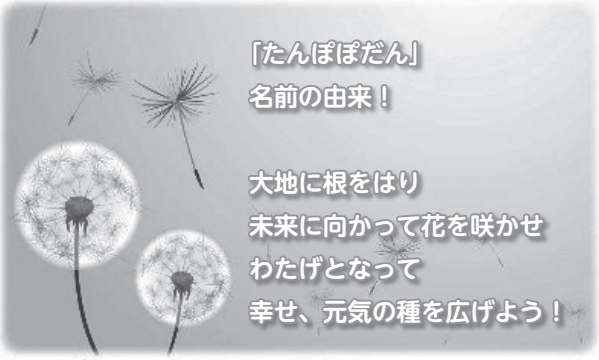
と同じ思いの人がいると言うことを伝えたかった。

実際私も先輩ママに助けられてここまで来た。息子が私の所に産まれてきたのは意味がある。そして息子のために学んだこと経験したことを後輩に繋いでいこう。１人でも元気になれるように！

こうして、當間隆也先生をはじめ多くの方々のご支援ご協力のもと「ダウン症 親の会たんぽぽだん」を立ち上げました。

たんぽぽだんの紹介

ダウン症　親の会「たんぽぽだん」



たんぽぽだんでは名前の由来をモットーにダウン症児のお腹の中にいる時のお母さんのケアから発育発達、日々の関わり方や保育所、就学相談、学校卒業後の就労相談、余暇生活などダウン症の方がその人らしく生活出来るように、兄弟、家族、サポーターと一緒にサポートしていきます。

【たんぽぽだん　団体の概要】

設　　立：平成16年４月

会　員　数：150名

サポーター：保健師、母子推進員、医師、看護師、各部門の専門の方、各学生ボランティア、各学校の先生、セラピスト等々

【活動概要】

★定例会→毎月１回　第４水曜日

勉強会、交流会など、親向け企画、

夏休み、春休みは子供たち向け企画

★ボランティア活動→年２回

赤い羽根共同募金街頭募金

歳末助け合い共同募金街頭募金

★創作太鼓「琉神美ら太鼓」

毎月２回　第２、第４水曜日

★バスケットボールチーム「ダンディライオンズ」

毎月２回　第１、第３木曜日

★その他スポーツ活動

年１回なはひやみかちウォーク等

おわりに

今回、「沖縄小児保健賞」をいただきありがとうございました。

ダウン症の息子が５才の時に主治医である當間隆也先生と親の会たんぽぽだんを立ち上げ、沢山の先輩ママや家族、医療関係のみなさん、福祉関係のみなさんのご協力ご支援のおかげで今年16年目を迎えています。

去年初めて出産前にダウン症とわかった方のサポートをしました。「沖縄ネウボラ」とまではいきませんが、今後も幅広く切れ目の無いサポートが出来るように頑張っていきますので、引き続きみなさんのご協力ご支援をよろしくお願いします。

最後に、今回いただいた副賞を長年切望していたバスケットボールチーム「ダンディライオンズ」のユニフォーム購入費用とさせていただきました。先日ようやくそのユニフォームが出来上がったので、ユニフォームのお披露目をかねて、交流試合を行いました。いつもより張り切るみんなの１シーンをもって感謝の言葉とさせていただきます。